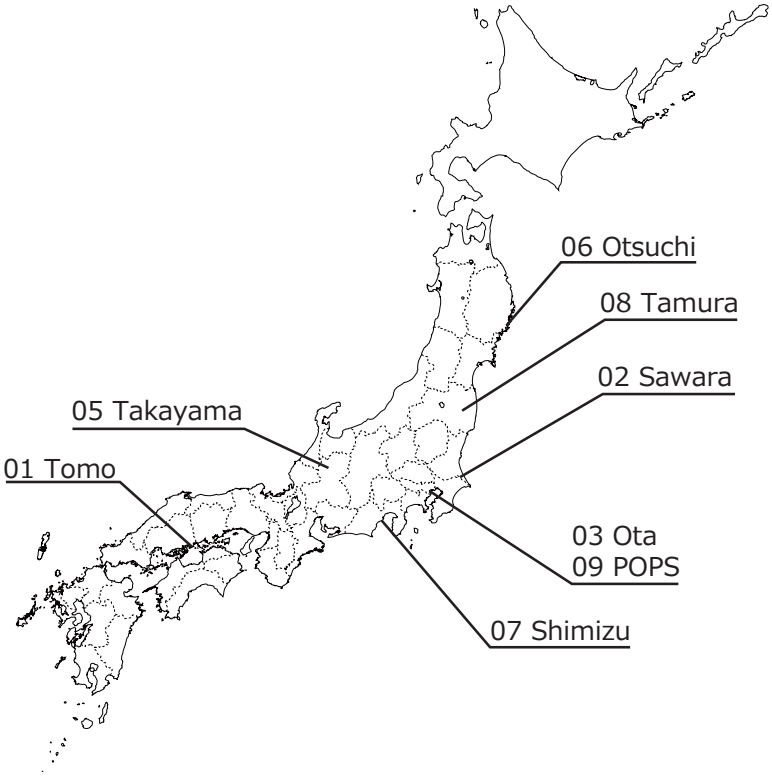
都市デザイン (西村・窪田) 研究室 / 空間計画（出口）研究室 / 清水研究室

2012 年度　プロジェクト報告会

2013/04/10

UDL project Map



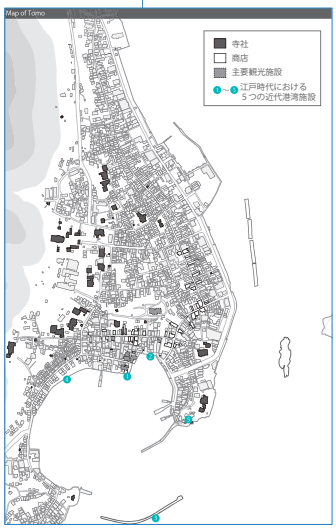
01 Tomo	鞆／広島県福山市
02 Sawara	佐原／千葉県香取市
03 Ota	大田／東京都大田区
04 Lumbini	ルンビニ／ネパール
05 Takayama	高山／岐阜県高山市
06 Otsuchi	大槌／岩手県下閉伊郡大槌町
07 Shimizu	清水／静岡県静岡市
08 Tamura	田村／福島県田村市
09 POPS	公開空地
10 Magazine	研究室マガジン

鞆　プロジェクト
Tomo Project

Urban Design Lab Projects 2012
01

MEMBERS
Aya KUBOTA (associate prof.)
Song Jiewon (D1)
Takami KITAGAWA (M2)
Hiroki BABA (M2)
Hana KASHIWABARA (M1)
Go MIYATA (M1)

潮待ちの港 鞆の浦　PORT TOWN OF TOMO



鞆は広島県福山市に位置する歴史的な港町であり、瀬戸内の美しい風景や近世港湾施設をはじめとした歴史的建造物等、多くの地域資源に恵まれている。江戸時代の 5 つの歴史的港湾施設が全て保存されている、日本で唯一の港町であり、近年では、映画「崖の上のポニョ」の舞台となった町としても知られている。

常夜灯

雁木（階段状の船着場）

波止（右の防波堤）

焚場（船の修理場所）

船番所（港の管理役所）

架橋埋め立て計画

一方で交通渋滞や人口減少、観光地化に伴う新たな問題等、様々な課題に直面している。特に狭小な道路による交通問題では、解決策として港湾の上にバイパスを造る埋め立て架橋が計画されているが、それにより破壊される特徴的な港湾景観をめぐり議論がなされている。

鞆 PJ の軌跡　A HISTRY OF TOMO PJ

2000 2001	まちの基礎的な研究・提案	T-House
2002 2003		
2004 2005	空き家の調査・研究	
2006 2007	瀬戸内海の港町の調査・研究	シンポジウム
2008 2009	交通調査、茶屋蔵の調査	ヨルトモ
2010 2011	祭事・生業の調査	

鞆プロジェクトは 2000 年に始まり、地元 NPO を始めとした住民の方々と共に数々の WS や研究展示、ヨルとも等のイベント開催、鞆雑誌の発行などを行ってきた。

鞆雑誌　TOMO MAGAZINE

Tomo Magazine 2000, 2001, 2006, 2008

Tomo Magazine 2011 (Next Coming)

「まちづくりってなんだろう」をテーマとし、研究成果や活動報告を数年に一度のペースで『鞆雑誌』にまとめ、地元の方々との共有を行っている。

2012 年度の活動

0513 -15	現地調査 空地・駐車場調査
5 月	学会論文投稿 空地調査の最終まとめ
0808 -10	現地調査 龍谷大の学生と共同調査
0930	全国まちづくり会議 in KOBE 鞆セッションで活動報告
1025 -27	現地調査 空地・駐車場調査
0321 -23	現地調査 港景観、 実測・ヒアリング調査

鞆の浦と空地

1 年間行なってきた空地調査と、それを元とした提案を合わせて冊子にまとめ、発行しました。

提案ページ

冊子「鞆の浦と空地」

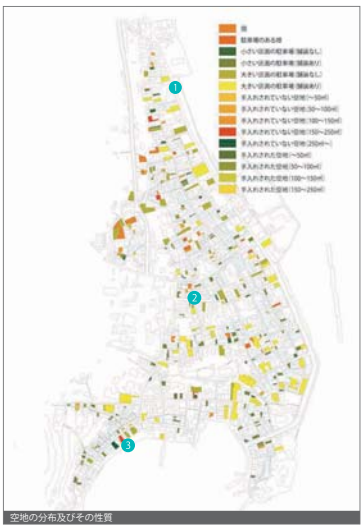
空地調査　RESEARCH ON VACANT LOT

昨年度後半から行なってきた空地調査のまとめ段階に入り、建築学会の投稿論文としてまとめると共に、調査から見えてきた、鞆ならではの空地の発生要因や使われ方の特徴を明確にし、空地を生かしたまちづくりの提案を行った。鞆では昔から小さな空地が共有の場として機能しており、今後とも増えていくと考えられる空地に対しても、積極的に利用し、空地という小さな分散した地点から、少しずつまち全体の暮らしを良くしていくことを提案した。

鉄工所の移転によりできた駐車場

土地所有者が空き家を倒して利用した空地

昔からある浜辺いの共有地


空地の分布及びその性質

港周り景観調査　LANDSCAPE SURVEY

2012 年度の後半からは、鞆港の景観分析を行っている。鞆を強く特徴づけている港周りの景観の特徴は何なのか、という視点に立ち、その特徴を大きく四項目（円を描くように囲い込む港、海が創りだす風景、港に面した町並み、様々な生活が感じられる空間）に分類し、それぞれの項目について、実測やヒアリング等の調査を重ねている。港周りの調査では、観光客に話しかける住民の姿もよく見られ、観光と生活のバランスをうまく形作ろうとしている鞆の姿が感じられる。

海を丸く囲みこむ鞆港の景観

港から鞆のまちと後山を望む

港に現れる仮設の八百屋さん

目視や航空写真とヒアリングによる鞆港の船の調査

海に面したオープンスペースの利用調査

佐原　プロジェクト
Sawara Project

Urban Design Lab Projects 2012
02

記憶でつなぐ「まちなか」づくり

associate prof. Aya KUBOTA
Jiewon SONG(D1)
Masaaki ANDO(M2)
Aya MATSUMOTO(M2)
Reiko OGASAWARA(M1)
Hana KASHIWABARA(M1)
Takashi KOSHIMURA(M1)

佐原プロジェクトの取り組み

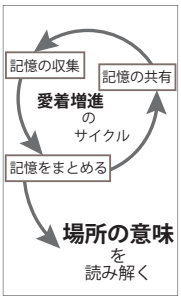
観光地として注目される佐原

千葉県香取市佐原は「北総の小江戸」と呼ばれ、江戸期に利根川水運とともに商業の町として栄えた。1996年に関東初の重伝建（重要伝統的建造物群保存地区）に指定された歴史的町並みや、佐原の大祭（重要無形民俗文化財）を目当てに多くの観光客が訪れる観光地となっている。

回遊性向上が課題

観光客の回遊は、街道と河川を軸とする重伝建指定範囲に限定される。本プロジェクトは、まち全体で来訪者を受け入れ観光の一極集中を緩和し、市街地を活性化させる「まちの回遊性の向上」に取り組んできた。

記憶から場所の意味を読み解く



2012年度は「回遊性向上」を意識しつつ、佐原のかつての賑わいや暮らしの様子を中心に人々の記憶を収集し、まとめ、それを共有する活動を行った。蓄積された記憶から「場所の意味」を読み解き、まちづくりに生かしていく狙いがある。

2012 年度活動カレンダー

さわら昭和の記憶とくらし展
秋の大祭に合わせ築 90 年以上の蔵をお借りして展示会を開催。

空家活用と橋詰空間の提案
市役所で提案を発表し参加者から多くの意見を伺う。

Apr. — May. — Jun. — Jul. — Aug. — Sep. — Oct. — Nov. — Dec. — Jan. — Feb. — Mar.

新メンバー加入

ヒアリング調査
・文献調査など

提案場所の現況
・歴史の調査

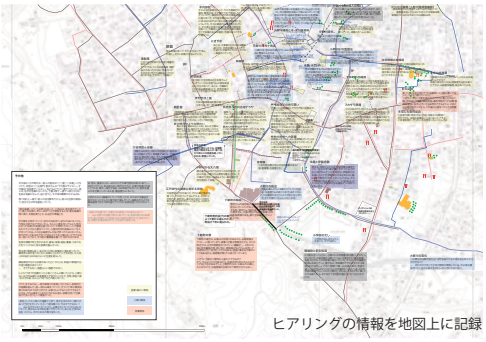
発表に向け模型等作成

報告書
執筆中

1. 記憶を収集する・裏付ける

ヒアリング調査

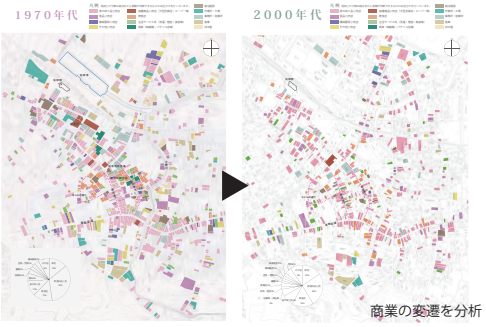
昭和初期の佐原を知る方々のもとにヒアリング調査に伺い、地図や古写真を見ながら記憶を語ってもらった。集めた情報は地図上に記録していった。



ヒアリングの情報を地図上に記録

歴史文献、商業の変遷を調査

収集した記憶を史実と対応させるため、市史等の歴史文献の調査を行ったほか、住宅地図で店舗の業種を分類し変遷を追った。各時代の記憶の背景となっている事柄をまとめていった。



商業の変遷を分析

2. 記憶を共有する

「さわら昭和の記憶とくらし展」開催

それまでの調査成果を10月の秋の大祭に合わせ展示した。3日間で380人が訪れ、地元の人、観光客に佐原の記憶を伝えた。また、訪れた人同士が展示を契機に自らの記憶を共有する姿も見られた。

パネル展示の様子

古写真のスライドショーも実施

川沿いの記憶をまとめたパネル

まちなかの聞き書き地図

3. 記憶をまちづくりに生かす

空家の活用提案と橋詰の改修提案

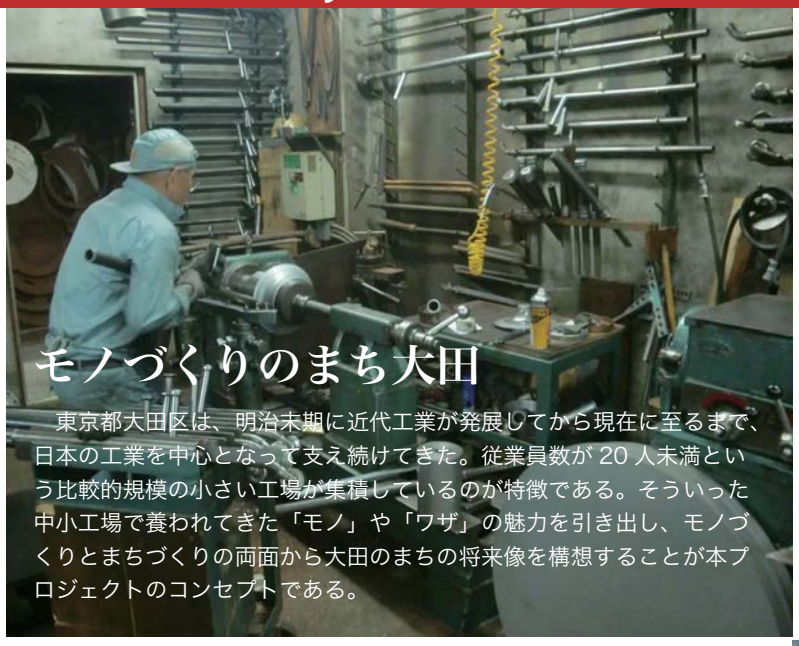
川沿いの空家を地元の人のための拠点と位置づけ活用する提案と、中心部の橋の袂で歴史を継承しつつ必要な機能を整備する提案。前者では記憶を伝えていくプログラムを提案に入れ、後者では記憶から場所の意味を考察し提案の方針とした。

川沿いの空家

中心部の橋の袂

今後に向けて

市役所での提案発表には30名を超える人が訪れ、多くの意見を伺うことができた。地元の人がまちへの思い、価値基準を議論する契機となった。また、提案を行った空家は2013年10月頃から実際に利用しながら活用方法を検討していくことになる。



モノづくりのまち大田

東京都大田区は、明治末期に近代工業が発展してから現在に至るまで、日本の工業を中心となって支え続けてきた。従業員数が 20 人未満という比較的規模の小さい工場が集積しているのが特徴である。そういった中小工場で養われてきた「モノ」や「ワザ」の魅力を引き出し、モノづくりとまちづくりの両面から大田のまちの将来像を構想することが本プロジェクトのコンセプトである。

大田クリエイティブタウン研究会

横浜国立大学（都市計画研究室）、首都大学東京（文化ツーリズム領域）、東京大学（都市デザイン研究室）の 3 大学と大田観光協会から成る「大田クリエイティブタウン研究会」として、2009 年から工場調査やイベント等を行っている。2012 年 2 月には工場公開イベント「おおたオープンファクトリー（以下OOF）」を初めて開催した。

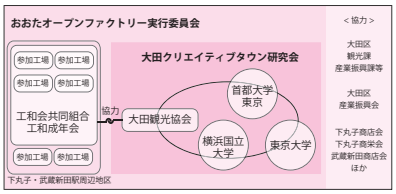
2012 年度は住工混在の実態を探るため、工場と住居が一体となった建築「工場町家」の調査を行った。9 月からは工場の組合である工和会共同組合との協働で第2回OOFを企画し、12 月に開催した。

▲工場町家調査

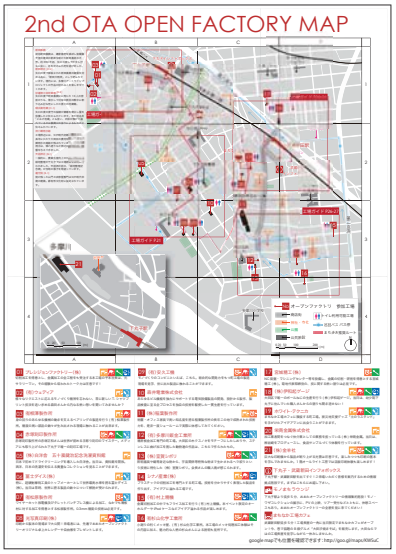
おおたオープンファクトリー開催

オープンファクトリーとは、エリア・期間を限定して行う、複数工場の同時開放による工場見学とそれに伴うまち巡りのイベントである。現在、多くの町工場が後継者確保、住工の相隣関係の維持、デザインと技術のマッチングなどの課題を抱えている。そこで地域住民や観光客らが町工場に近づくきっかけづくりをすることで、モノづくりのまちを地域内外にアピールし、産業観光の活性化とエリアプロモーションを狙う。

2011 年度のプロジェクトメンバーで開催した第 1 回 OOF への反響を受け、2012 年 12 月 1 日に第 2 回 OOF を開催した。東急多摩川線の下丸子・武蔵新田駅周辺エリアの 27 社が参加し、約 1500 人が来場した。実行委員会では各工場に担当学生が付き、工場見学の方式やまち巡りツアーの企画、グッズのデザインなどについて話し合いを重ね、それぞれの工場の特色に合わせたイベントコンテンツを用意した。工場見学の形態を第 1 回と異なるものにしたほか、様々なツアーやこども向けのスタンプラリーの実施、展示・回遊拠点の設置など、第 1 回にはなかった新たな試みにより、今後への可能性や課題を発見できた。



展示拠点



工場見学ツアー

子ども向け企画

グッズ販売（ガチャガチャ）

今後に向けて

▼2012年度の活動年表

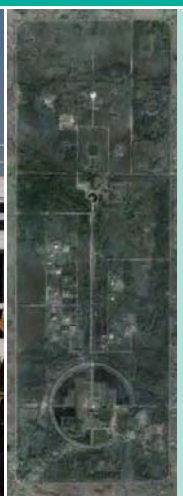
- 4
- 5 ■ 現地見学
  工場町家調査
  OOF企画検討
- 6
- 7 月１ベースで
  蒲田周辺にて MTG
- 8
- 9 ■ OOF実行委員会始動
- 10 実行委員会会議
  工場との打ち合わせ
  企画担当ごとの打ち合わせ
- 11
- 12 ■ 第2回OOF開催
- 1 ■ OOF振り返り
- 2
- 3

2013年秋　第3回OOF開催予定!!

2012 年度の活動で工場との連携が強まったことに加え、近隣商店街へのOOFの周知などにより、更に地域全体での広がりのある活動への可能性が感じられた。2013 年度は昨年から行っている工場町家調査のまとめと共に、第2回OOF の振り返りと次回OOFの企画を進める予定である。

MEMBERS: Kaori FUKUSHI(M1)・Members of TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY and YOKOHAMA NATIONAL UNIVERSITY

ルンビニ　プロジェクト
Lumbini Project

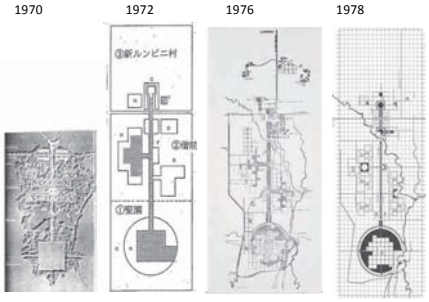


1997 年ユネスコの世界文化遺産に登録された「仏陀の生誕地ルンビニ」には、当研究室の創立者である丹下健三先生がその整備方針をまとめたルンビニマスタープラン（1978 年）があります。しかし長年に渡る整備事業の遅れにより、マスタープランを無視した無秩序な開発や、当時想定していなかった問題が生じてきました。

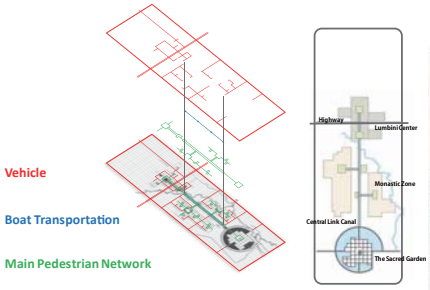
私たちはユネスコの依頼により西村教授がリーダーを務める国際専門家チームの１つとして丹下マスタープランの再解釈を通し、現在進行中の整備開発事業に対して助言を行ったり、今後の整備方針を検討したりしています。

○ 丹下マスタープランの再解釈　Review of Kenzo Tange's Master Plan

散逸資料の収集や当時の関係者ヒアリングを行い、丹下マスタープランが最終形に辿り着くまでの変遷を追うことで、観光需要や経済状況が変化した現代においても適用可能な設計原則及び全体骨格を明らかにしました。

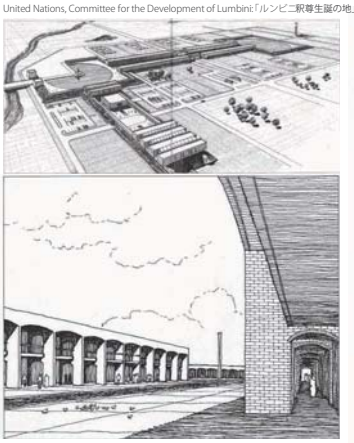


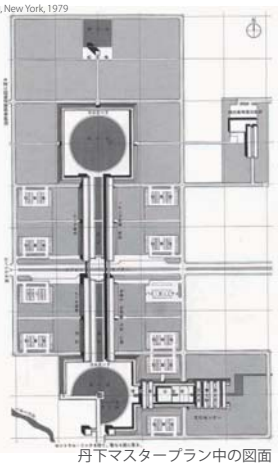
マスタープラン変遷



マスタープランの骨格分析

United Nations, Committee for the Development of Lumbini:「ルンビニ釈尊生誕の地」, New York, 1979

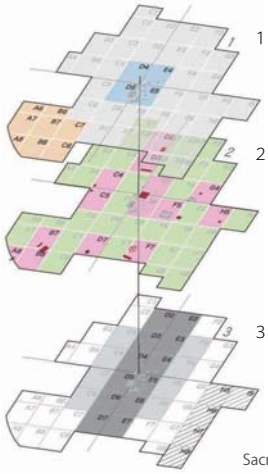




丹下マスタープラン中の図面

○ 整備事業への助言　Reorientation of new projects under construction

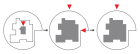
丹下マスタープランを丁寧に分析することで見えてきた現状との矛盾や、それによって生じている問題を調査し、具体的な Sacred Garden 整備事業の細かな助言および中長期的な全体計画と結びついたマネジメント方法などを提案しました。



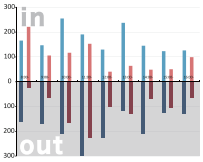
1．考古学調査を反映させた遺跡保護

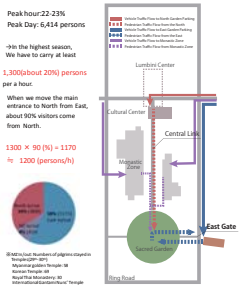
2．不要構造物の除去とランドスケープ整備

3．景観軸の尊重

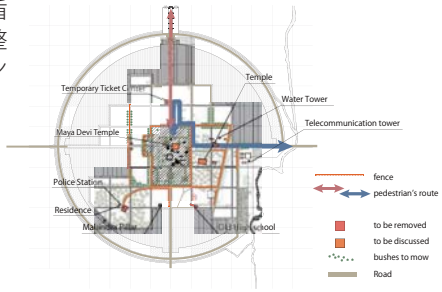


Sacred Garden 整備の考え方

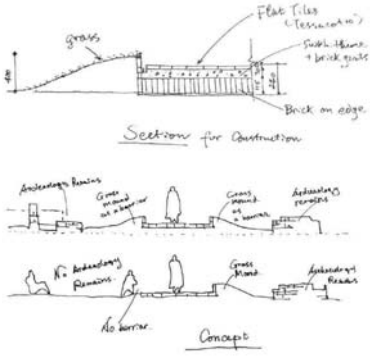




全体の交通状況分析



Sacred Garden の現状調査

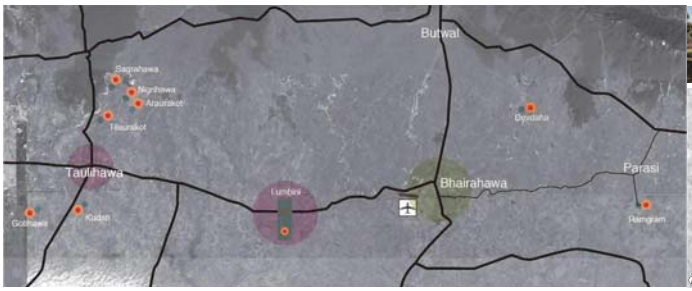


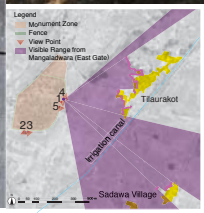
Sacred Garden 内の歩道デザインの提案

南北交通需要に対応するための Central Link 改善断面図

○ 今後の整備方針立案　Towards Regional Conservation Planning for Buddhist Sites

ルンビニ周辺には釈迦（仏陀）由来の仏教遺跡が広域的に散在しています。中には世界遺産の暫定リストに登録されている貴重な遺跡もありますが、現在包括的な保全計画がありません。将来的にこの地域全体の観光活用および保全が適切に図られるよう、潜在的な開発エリア及び規制区域の検討を進めています。





Tilaurakot での景観分析

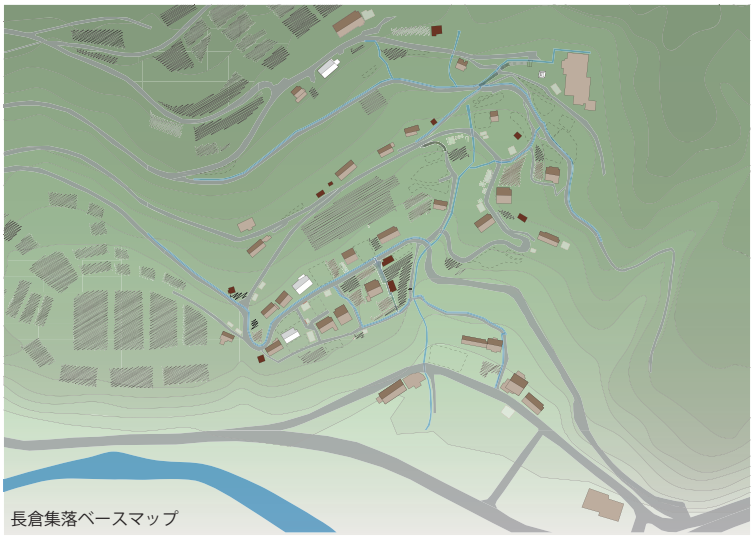
Project Members 2012　Prof. NISHIMURA Yukio　Assistant Prof. KUROSE Takefumi　Researcher FU Shulan　M1 KODAMA Chie

農山村集落の未来を描く
Planing for Area Management

92%が山林である高山市は、旧高山城下町である高山市街地から延びる五つの街道沿いに、集落が点在するという構造を持つ。2011 年度以降は、活動の舞台を市街地から北へ、上宝町に位置する長倉集落へ移した。高山文化の影響を受けつつも、斜面地という特殊な地形により独特の文化が育まれた地域である。現在人が住んでいる地区だけで見ても、高低差 120m もある傾斜地をはじめ、壮大な自然に囲まれている。

2012. Members

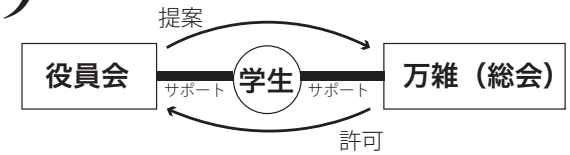
Taku Nohara	Yokohama National Univ. Associate Prof.
Chie Kodama	Urban Eng. Dept. (ud labo) M1
Noriko Iwasaki	Arch Urb Cult Dept. YNU M1
Shohei Ohno	Arch Urb Cult Dept. YNU M1



長倉集落ベースマップ

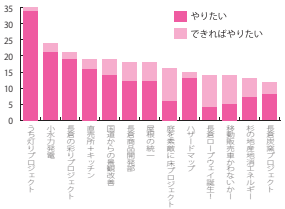
典型的な中山間地域であり、過疎化に悩まされるこの集落には、一方で密接な人間関係や、豊かな自然、文化的営みなどの資源も豊富に残っている。それらを踏まえ、この集落が自身の力で存続していくために、集落の人々と共に地域マネジメント計画を策定した。そして、その計画が実際に実行に移されるにはどういったサポートが必要なのかを探ってきた。

地域マネジメント計画策定後のフォローアップ
Support after making the Area Management Plan



2011 年度を通して住民の皆さんとワークショップをしながら作成した地域マネジメント計画書が印刷製本完成！集落役員会でお披露目しました。

地域マネジメント計画書▶



計画書に盛り込まれた事業のうち、実行に移したいという声の強いものについて、具体的な検討を進めます。

◀事業アイデアカード投票結果

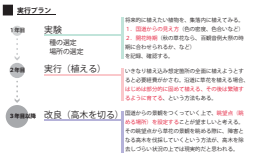
◀全世帯が一堂に会す万雑

役員会　7 月

役員会　8 月　第一回現地訪問

具体的な検討を進める事業について「誰が、いつ、どこで、何をやれば」実現にむけて動き出せるのかをまとめた企画書を作成し、役員会で話し合います。

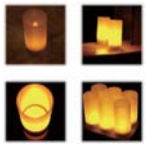
秋万雑　9 月



アイデアから企画へ

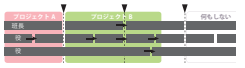
役員会 10 月　第二回現地訪問

今期取り組むことになったうちあかりプロジェクト（PJ) についての詳細企画案を複数提示し、具体案を引き出します。



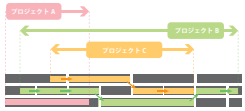
臨時総会・秋祭り 11 月　第三回現地訪問

うちあかり事業を皮切りに、今後役員会と万雑が地域マネジメント計画にどう取り組んでいくか、問題提起します。



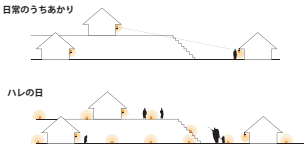
1 月　第四回現地訪問

数軒で実験点灯するうちあかりの照明器具の様子を役員と一緒に確認します。



春万雑　3 月　第五回現地訪問

全戸点灯にむけて、プロジェクトの区切りに際して点灯式を行うことを提案します。



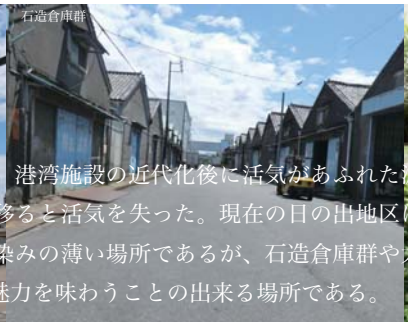
長倉集落には、住民が交代で務める役員による役員会と、住民全員の意見をすり合わせる万雑という大きなシステムがある。特に役員の中心には班長の役があり、

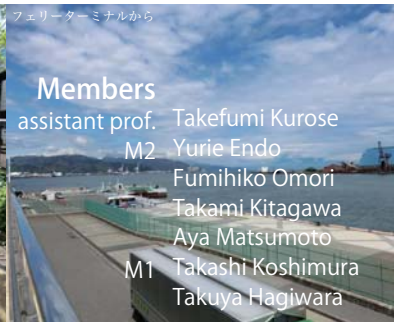
① 班長が任期ごとに取り組む事業を定める
② 万雑でその事業に取り組む合意を得る
③ 実現に向けて役員会が企画をつめる

というわかりやすい体制が採用された。私たちの役目は、班長や役員に対する企画の実現にむけた詳しい情報提供、万雑で合意を得るための資料作成等を通じ、次々と周辺住民を巻き込みながら、集落の未来を皆が考える形を模索することである。

長倉集落の様子

清水　プロジェクト
Shimizu Project





巴川の川湊として始まった清水の湊。港湾施設の近代化後に活気があふれた波止場や日の出埠頭は、港の中心がコンテナ埠頭に移ると活気を失った。現在の日の出地区は物流事業者が出入りする、地元住民にとっては馴染みの薄い場所であるが、石造倉庫群や大型船舶が往来する港の風景など、清水ならではの魅力を味わうことの出来る場所である。

Members
assistant prof. Takefumi Kurose
M2 Yurie Endo
Fumihiko Omori
Takami Kitagawa
Aya Matsumoto
M1 Takashi Koshimura
Takuya Hagiwara

清水プロジェクトの取り組み

みなとの再生に向けて

清水 PJ チームでは、活気を失った港湾地区の再生・利活用に向けて静岡市清水区を中心に活動を行なっている。2011 年度は日の出地区を中心に清水港の空間資源調査を行った。2012 年度は更に調査を進めると共に、地元の理解を深め、利活用への関心を高めるイベントを積極的に行った。

▲静岡県静岡市清水区周辺

▲清水港日の出地区

2012 年度の活動

4 月	第 1 回現地調査
7 月	波止場通りヒアリング
	石蔵の実測調査
8 月	子ども向け WS
11 月	ミナトブンカサイ
12 月	巴川調査
3 月	大分・広島事例調査

波止場通りヒアリング調査

みなとを知る・魅力を見つける

かつて波止場、日の出地区の港湾労働者や三保の造船所等で働く人たちで賑わっていた波止場通り（現エスパルス通り）で働くの店主のみなさんから通りやかつての波止場の賑わいの様子についてお話を伺った。

▲商店主のみなさんからのヒアリング風景

▲昭和 30 年代の波止場通りの様子（ヒアリングまとめ）

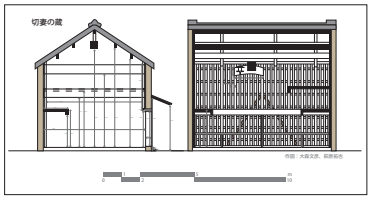
石蔵調査 / 巴川調査

周辺との関係を考える

清水のもともと川湊があった巴川に関する調査や江戸時代から港と関係の深い廻船問屋に残る石蔵の実測調査といった地域の空間資源や周辺環境の調査を行った。

今後、清水港と周辺地域との関係や一体的な空間計画を考える際のきっかけとなると考えられる。

▲巴川での調査の様子



▲実測した石群の断面図

ミナトブンカサイ

みなとの魅力を発信する・理解を高める

地元市民の日の出地区やその周辺に対する理解を高め、今後の日の出地区の利活用について可能性を示すことを目指し、石造屋根倉庫群の前面道路を会場としてた賑わい創出イベントを行った。地元の商店や大学生と協力した露店や音楽ステージ等の企画や、夜間には倉庫群のライトアップも行った。当日は、会場に 1500 人を超える人が訪れ、多くの方が、港の雰囲気を堪能した。

▲イベント当日の石造倉庫群の様子

▲ミナトブンカサイ開催の報告パンフレット

子ども向け WS

みなとに親しむ

地元の小学生と保護者を対象にした日の出地区のまちあるきとワークショップを行った。まちあるきでは、清水港の歴史と現状を実際に目で見て、その魅力を体感し、クイズとともに楽しく学んだ。ワークショップでは参加した児童がまちあるきや学んだことをもとに「自分たちの住まう清水のまちや港に、どんな施設・機能が欲しいか」を自由に考え、清水 PJ メンバーと共に模型を作成した。

▲みなとあるきの様子

▲完成した模型の前で記念撮影

今度の活動

空間資源の利活用に向けて

2012 年度までの活動で、一時的な港の空間活用を提案することができたが、港湾の再生に向けては日常的な利用を定着させること、地元の方々の力を引き出すことが必要である。今後は 2013 年 3 月に行った港湾施設の活用事例調査を参考にしながら、石造倉庫群や県営上屋等の空間資源の日常的な利用に向けて、地元団体・大学と連携しながら活用提案・活用実験を行う。

▲NPO を主体とした大分港の再生事例

大槌　プロジェクト
Otsuchi Project

Members
associate prof. Aya Kubota
Taku Nohara
senior assistant prof. Setsuji Nagase
assistant prof. Yu Okamura
Takefumi Kurose
visiting scholar Akiko Tanaka
D2 Tomoko Mori
Kosuke Kambara
M1 Takuya Hagiwara
Kaori Fukushi

大槌プロジェクトの取り組み

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災後、都市デザイン研究室では東大海洋研のあった大槌町赤浜で集落の被災状況等に関する調査活動を開始。その後 2011 年度は、大槌町を知ること、復興への示唆を得ることを目的に町の文化資源を調査・整理し、ヒアリングや写真からまちの記憶を掘り起こした。2012 年度も文化資源調査を行うとともに、より詳細に震災前の生活風景を浮かび上がらせるためにヒアリング等を行い、加えて震災時の避難行動の調査を行った。

▲大槌町沿岸部マップ

2012 年度の活動

5 月	現地調査
8 月	吉里吉里思い出サロン
	吉里吉里例大祭調査
12 月～	赤浜集落避難行動調査
2 月	黒森神楽調査
3 月	避難行動調査冊子発行

文化資源調査

2011 年度から町に根付いてきた祭礼や伝統芸能、漁業文化、湧水のある暮らし等を調査・記録してきた。これらの調査は震災によって消えかかった町の文化の記録となるだけでなく、例えばまちなかでの祭礼や芸能と結びついた広場の計画や湧水や漁業資源を生かした新しい産業づくりの手助けとなり、大槌町らしいく空間づくりや集落再生に繋がると考えている。

海上調査

漁船に乗り込み、会場から各集落の地形的特徴や漁師が目印とする岩場や遠景の山地等の様子を調査をした。

▲磯浜の様子を観察

黒森神楽調査

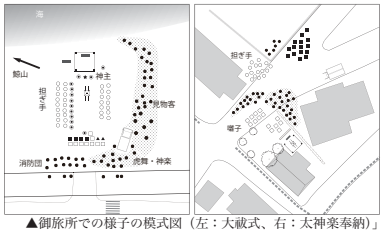
岩手県沿岸を巡業する「廻り神楽」の一つである黒森神楽についての調査。漁業文化との結び付きが強い。

▲吉里吉里佐野瑯での巡業

吉里吉里例大祭

吉里吉里集落の例大祭の調査を行った。震災後初めての神輿渡御の様子や虎舞・鹿子踊り等の伝統芸能の記録を行った。ハレの日の空間づくりに繋げていく事ができる。

▲宮入り直前の様子

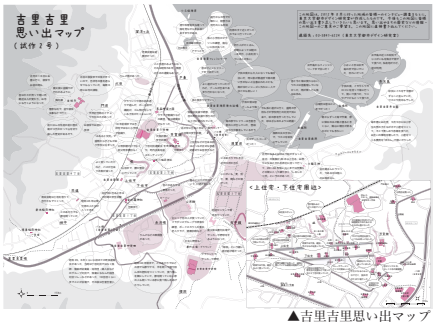


▲御旅所での様子の模式図（左：大祓式、右：太神楽奉納）

吉里吉里思い出サロン／マップ

震災前、吉里吉里集落内ではどのような日常があったのかを明らかにするために、被災した店舗をお借りして「吉里吉里思い出サロン」を開くとともに、仮設住宅等も訪問し、人々が集っていた場所、漁業の様子、こどもたちの遊び場などをヒアリングした。集落内の公共施設や広場の使い方や、庭や縁側での「お茶っこ」の様子等について詳しくお話を聞くことができた。まちの記憶の共有を図って、これらの内容を基に「思い出マップ」を作成し、地元の方々にお渡ししている。

▲2012 年 8 月に行った吉里吉里思い出サロンの様子

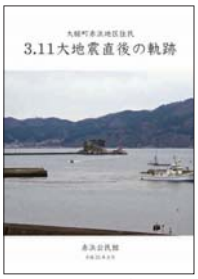


▲吉里吉里思い出マップ

赤浜集落避難行動調査

震災発生時、人々がどのように考え、どのような避難行動をとったのか、赤浜集落でヒアリング調査を行い、避難のきっかけとなる出来事や避難場所等についてまとめた。また、これとともに集まった避難行動の記録を赤浜集落の中での教訓として未来に受け継いでいきたいという地元の方々の思いをきっかけに、ヒアリングした内容を 1 冊の文集にまとめた。

▲住民の避難経路の例



▲完成した冊子

今後の活動に向けて

避難行動調査をもとに地域住民とともに、発災時にどのような行動をとるべきか学習する避難行動ワークショップを行ったり、まちの様子を伺ったヒアリングをもとに集落内の公共空間への考え方や民家の特徴等に関する知見をまとめ、復興計画の中で公共空間づくりや住宅再建時のヒントとしていくことができると考えている。

田村　プロジェクト
Tamura Project

プロジェクトメンバー

新領域創成科学研究科　清水亮研究室
空間計画 / 出口敦研究室　小笠原れい子　原田　恵
井上　雄仁　遠藤友里恵
久野　恭平　宮崎　智裕

UDCT 田村地域デザインセンターとは

田村地域デザインセンター（UrbanDesignCenterTamura :UDCT）は福島県田村市において、まちづくりを研究し、実践する地域密着のシンクタンクである。平成 20 年 8 月に田村市、住民団体、東京大学が共同設立した。公・民・学が連携して、地域の未来を切り開き、諸課題に取組む新しい公共体である。

現地調査・学生提案作成（2012.6~)

2012年6月より、田村市全域を対象とした調査を開始した。これまでの各地域での調査を踏まえ、行政や住民に対するヒアリング調査や文献調査を通じて、学生からの提案書を作成した。

現地調査 2012 Jun.
滝根町、大越町現地見学
ヒアリング調査

滝根町でのヒアリングの様子

旧大越娯楽場見学の様子

Jul.
船引町、都路村現地見学
ヒアリング調査

船引町での現地調査の様子

UDCTでのヒアリング調査の様子

Sep.
近隣地域、観光資源見学
ヒアリング調査

市担当チームへのヒアリング調査の様子

あぶくま洞現地見学の様子

Nov.
東日本大震災で避難していた地域の見学とヒアリング調査

社会実験補佐

都路町現地視察の様子

前年度プロジェクトの社会実験補佐の様子

方針提案 Nov.
田村市プロジェクトチームとの意見交換会

意見交換会の様子

ヒアリング調査の様子

2013 Jan.
田村市長への中間報告
意見交換会

市長への中間報告の様子

市長への中間報告の様子

Mar.
UDCT運営委員会での報告会
意見交換会

UDCT運営委員会での意見交換会の様子

常葉町での住民への報告会の様子

社会実験 Apr.~
住民や行政と協力しながら「社会実験」という形で、具体的に提案を見せていく

昨年度の社会実験の様子

昨年度の社会実験の様子

各地域におけるこれまでの取り組み

船引 (2007 ~ 08)
「住み続けられる町」

都路 (2011)
「人のつながりを活かし、新たな『つながり』を展開させる都路のまちづくり」

大越 (2010)
「大越が持つ資源の価値を共有し、つなげるまちづくり」

常葉 (2012)「かえる 未来 ときわ
～世代、産業、地域をこえたネットワーク～」

滝根 (2009)
「生活空間を魅せる」

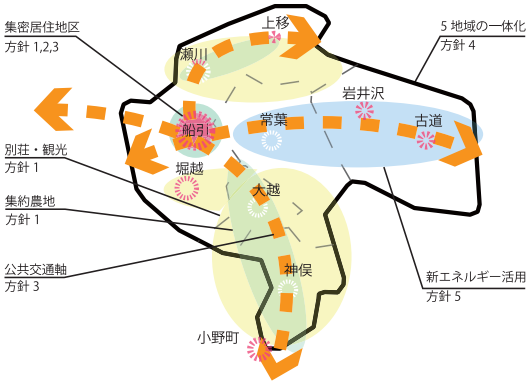
学生提案

問題意識

元々公共交通の衰退など、多くの日本の地方都市に見られるような課題を抱えており、大きな転機として旧5地域の市町村合併による田村市の誕生があった。しかし各地域の活力が保たれているとも言えず、市としてのまとまりにも欠けてしまっている。そこに東日本大震災が発生し、主産業だった農業の衰退、人口流失の加速など、さらに多くの課題と直面している。

まちづくりの基本理念

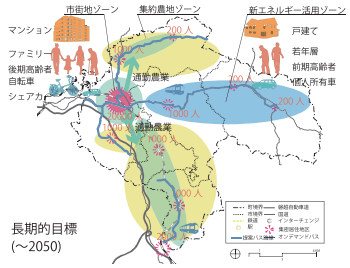
自然と文化を結い直し、小さなまちから大きなつながりを生む



各地域で自立している現在のまちづくりを発展させ、「田村市」という1つの枠組みをより重視した取り組みを行っていく。各地域の枠を超えた「田村市」という視点からの効率的な資源の活用や、各地域の特色を活かした田村市全体を見通した地域資源の利活用を行う。「田村市」としてのつながりを生み、次世代に向けた発展を目指す。

目標 1　効率的な資源活用に基づいた、都市構造や日常生活サービスの再構築

「集密居住地区」を設定し、その地区を中心に、住民の移住の奨励や、都市施設の再配置、公共交通システムの利便性向上などを図る。



集密居住地区の他、農地エリアや自然に囲まれた別荘地エリアなどを設定。集約化し効率的な都市構造の創造と、多様なライフスタイルの選択の両立を目指す。

公共バスが維持可能な利用率を算出。その利用率を達成するため、バス停をより利用しやすくするための整備やオンデマンドバスの導入を検討する。

配置に偏りがあり、空き部屋も多い公共施設の再配置プランを提示する。さらに、空き部屋を利用した市民大学の開催や、交流スペースの設置などを行う。

目標 2　「田村市」独自の資源の活用による活力向上

「田村市」という大きな視点から 5 地域全体の資源をとらえ直し、住民の中に 5 地域にとらわれない「田村市民」としての意識を醸成することによる活力向上を図る。

地域資源を扱ったドキュメンタリー作成など、市民が主体的に企画運営を行い地域資源の魅力発見につながるイベントを行う。そのことによって「田村市」全体としての一体感を高める。

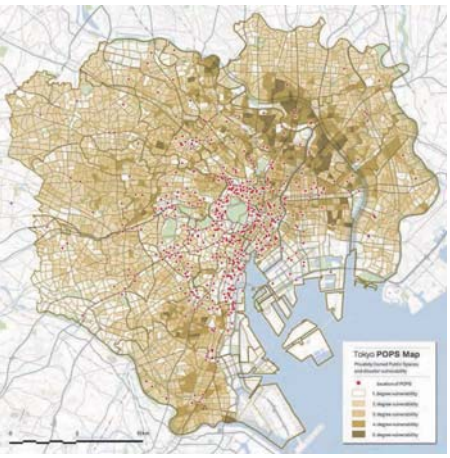
市民間で盛んに行われている文化活動など、日常生活に潜んでいる地域資源を利用した小規模のコミュニティビジネスを行う。また、自然資源の新たな利用法を検討する。

SUR
SUSTAINABLE URBAN REGENERATION
Center for Sustainable Urban Regeneration, The University of Tokyo
東京大学・都市持続再生研究センター
25
SUR
Jan. / 2013

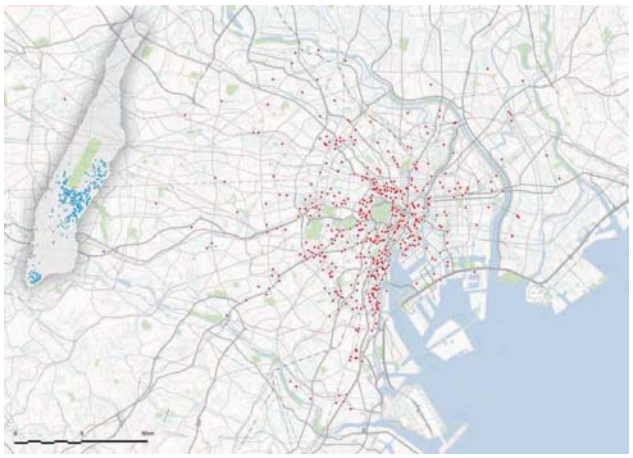
In Tokyo alone more than 700 so-called privately owned public spaces (POPS 公開空地) exist at the foot of countless downtown high-rise buildings. Although the surface area of those privately owned public spaces is bigger than 11.5 times Hibiya Park, and although incentive zoning, the planning tool that creates them has a tremendous impact on the cityscape, these spaces have been little understood to this day. Studies so far have looked at, first, how people use POPS; second, which geometric forms these spaces take; or third, how which planning tool developed over history. However, what is critically lacking, is an examination of privately owned public spaces in their spatial, governance, social, functional, and formal context. This project seeks to fill this gap and seeks to answer the a broad and comprehensive array of questions for the various level of the research.

Planning Policy Dimension:
Who are the main actors in the production process of POPS, what are their main interests, resources and interdependencies? How do local planning and political cultures influence these interdependencies? What are the implications of this for future planning processes and urban governance?

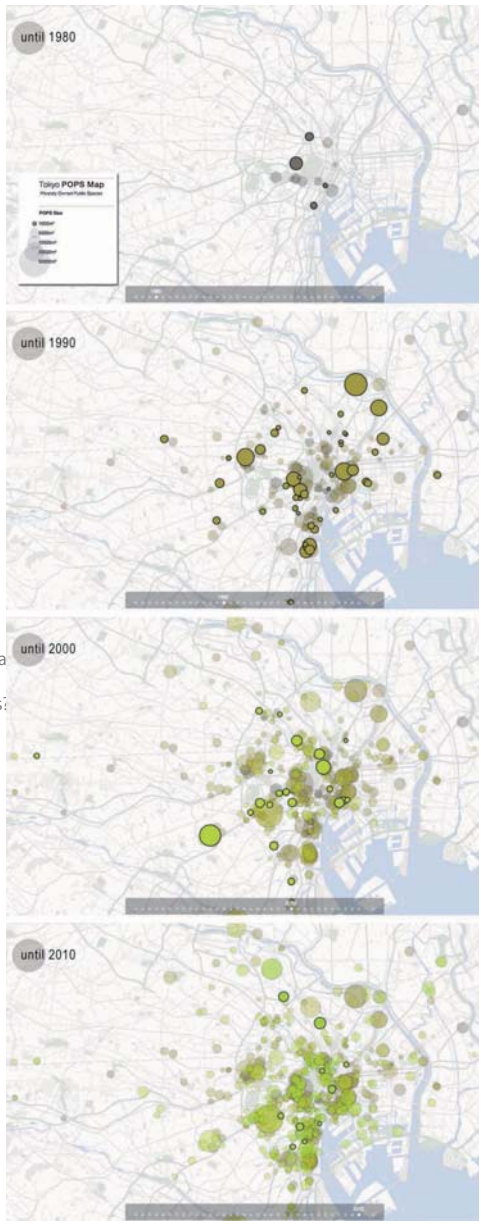
Spatial Dimension:
How many POPS exist, where are they located, which factors determine their location, size, form, lay-out, design features and connectivity to other adjacent public spaces? How did design and form change over time? What are the driving socio-economic factors behind these transformations?



Destribution of Tokyo POPS relative to disaster vulnerability



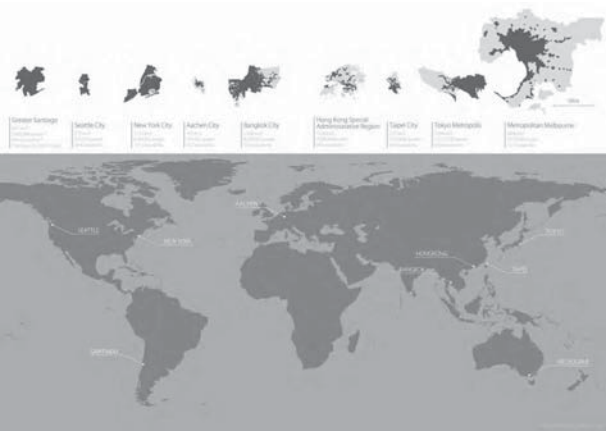
Destribution of Tokyo POPS compared to Manhattan and in relation to major parks



Development and size of POPS in Tokyo over time

Social Dimension:
Who uses POPS when, how, and for what reason? Are POPS appropriated and contested? Does private property right collide with the mandated public nature of those spaces? How does the presence of privately owned public spaces influence the notions of public space in general?

{Inter}national Dimension:
Which cause-effect relations produce, govern and regulate publicly usable spaces at the nexus of public and private interests in Japan and how a why does that differ from Germany, Chile, Australia, Hongkong, Taiwan, Hongkong, Thailand or the USA, where similar incentive tools are used? How do local histories, geographies, planning and political cultures influence the manifestation of the same planning instrument in Japanese cities?



International Case Study Cities

International research collaborators

About

・研究室の「今」を、研究室で共有
・研究室の「今」を、世界へ発信
・先輩 OB・OG の活躍を伝える
・旧交を温める

これらをコンセプトとして、
毎月 10 日・25 日に発行

History

2005 年 4 月創刊
初代編集長は酒井憲一氏。
朝日新聞記者を経て 成城大学短期大学部非常勤講師（都市論、アメニティ論）、AMR 日本アメニティ研究所専務理事。05 年に研究生として都市デザイン研究室に在籍し、マガジンを創刊する。

▲積み重ねられた歴史

Members

編集長　：大森 文彦(M2)
編集部員：石井 かおる(M2)
北川 貴巳(M2)
松本 綾(M2)
柏原 葉那(M1)
越村 高至(M1)
萩原 拓也(M1)
福士 薫(M1)

連載企画

都市デザイン研究室マガジンには多くの連載企画がある。2012 年度にはまちづくり大学院に所属する社会人大学院生の方々に、お仕事での経験や都市への思いを語っていただく**「まち大コーナー」**という新たな連載企画が始動した。他にも、研究室 OB・OG に卒業後のお仕事や活動について寄稿していただく**「全国 OB・OG めぐり」**、留学生ならではの視点で日本の好きなまちについて語る**「留学生コーナー」**、博士の学生がそれぞれの研究テーマを紹介する**「Road to Doctor」**など、様々な角度から情報発信を行っている。

社会科見学部

マガジン編集部員が見学したい場所やまちを実際に訪れレポートする。昨年度は M2、M1 がそれぞれ三菱一号館美術館と東京都水道博物館を見学した。三菱一号館美術館では展覧会と共に、復元された三菱一号館の建築そのものの美しさを味わうことができ、水道博物館では充実した展示により東京を支えてきた水道の歴史を体感できた。まちを多角的にとらえ、より豊富な話題をお伝えするべく、今後も社会科見学部は継続していく予定である。

プロジェクト報告

研究室マガジンにおいて最も多く取り上げられているのが、各プロジェクトの活動報告である。2012 年度も、活発な活動を伝える記事が毎号に掲載された。現地調査等についてプロジェクトメンバーが報告するほか、イベントや社会実験開催時・活動終了時などは、一面に大きく特集記事を掲載する。

特大号発行

年末には A3 両面版の特大号を発行し、１年間のプロジェクト活動の振り返りや翌年に向けての先生方からの言葉が掲載される。2012 年度はこれに加え、西村先生のご還暦をお祝いして、先生のこれまでの軌跡をまとめた特大号を発行した。